

棚田学会通信

第41号 目次

特集 棚田と観光(Ⅲ)……………	1
—三重県熊野市・丸山千枚田—	
事務局ニュース……………	6
現地見学会報告……………	7
日本の棚田百選紹介 鬼木棚田……………	8



写真提供：熊野市ふるさと振興公社

特集 棚田と観光(Ⅲ)

—三重県熊野市・丸山千枚田—

写真提供：北 富士夫氏



オーナー制度などの取り組みを進めている棚田地域で、田植えや稲刈りなどの農作業体験をイベントとして行う形も一定の定着をみせてきている。ふだんは閑散とした棚田地域にも、この時は大勢のオーナー家族や地元の人たちでにぎわう。受け入れにはそれなりの苦勞や困難もあるが、それを上回るだけのやり甲斐があることで、地元農家の誇りの回復にもつながっている。

ただ、各地の棚田で同様のイベントが広がることでの問題点もあろう。これからオーナーになろうとする人々による、どの地域の棚田が魅力的な棚田か、という「選別」が始まるからである。その際、この棚田にしかない魅力をどう引き出すかが、棚田地域にとっては課題となる。

特集「棚田と観光」の3回目は、一度途絶えた伝統的な民俗行事を、文献などに基づいて忠実に復活させたり、地域の伝統食材や特産品を使った商品開発などの取り組みを行っている三重県熊野市の丸山千枚田の事例を紹介する。

丸山千枚田

(一財)熊野市ふるさと振興公社 農業公社事業部
公益事業グループ サブリーダー 丸山千枚田担当

長野 秀信

熊野市は、三重県南部の和歌山県と奈良県の県境に位置しており、熊野本宮大社や熊野速玉大社、熊野那智大社の熊野三山に通じる熊野古道があり、山々に囲まれた町となっております。

丸山千枚田がある紀和町丸山地区は熊野市の南西部に位置しており、面積は2.3平方キロメートルで典型的な高齢者集落であり、30世帯45人の73.2%が65歳を越えている状況となっております。その丸山地区に南西向きの斜面を埋め尽くすように棚田が広がり、その棚田を望む位置に集落が点在しています。季節や時間帯によって様々な表情があり、毎年多くの観光客やカメラマンが訪れます。

丸山地区に棚田が造成された時代は不明ですが、紀和町史によると慶長6年(1601年)に紀州藩主浅野幸長による領内一斉の検地が行われ、7町1反8畝、2,240枚の水田があったと記録されています。紀州藩では新田を開拓した者は作徳と称し3年間無年貢、4年目からの年貢も本田より低い率であったため、江戸時代中期は盛んに開拓され、明治時代には約11町歩まで面積が広がり、その後昭和30年代まではほぼそのままの姿がとどめられていました。しかし、日本の高度成長によって若者が都市部へ流出し後継者不足が生じた事に加え、減反政策や地区の過疎化・高齢化に伴い、作業効率の悪い田圃は杉の植林が行われるなど徐々に耕作放棄されて行きました。その結果、2000枚以上あった田圃が平成初期には約4町6反、530枚まで減少してしまいました。一度、荒地になってしまうと、山間部で高齢化の進む地域では、元に戻す事が困難となります。狭い土地を有効に活用し、一粒でも多くの米を収穫しようと努力してきた先人たちの歴史でもあり、その先代から受け継いだ農地を自分達の代で荒らしてしまっては申し訳ないという強い思いがあったて当然です。

こうしたこともあり、平成5年、先代から受け継いだ田圃を将来に残したいという地元集落の熱意と、荒れてしまった貴重な地域資源である丸山千枚田を復田することにより地域振興を図り、地域活性化につなげていきたいという熊野市(旧紀和町)との思いが一致し、平成5年4月1日市が100%出資を行い、生産事業や特産物加工、農地保全等を目的として「一般財団法人 熊野市ふるさと振興公社」(旧紀和町ふるさと公社)の設立をおこない、平成5年8月23日に丸山地区31戸による「丸山千枚田保存会」が結成され、市を含めた3者による棚

田の復田にむけての連携体制が整えられました。そして平成5年から平成8年までの4カ年で810枚を復田し、7町2反、1340枚の規模をほこる棚田となりました。

また、復田期間中の平成6年3月には、千枚田を貴重な文化遺産ととらえ、市・市民が一体となって景観の保護に努めるとともに、有効に活用することにより「ふるさと」づくりに資することを目的として、全国でも初めての「熊野市丸山千枚田条例」が制定されました。

丸山千枚田の復田は生産の場のみならず、景観形成による観光集客など一定の成果が得られましたが、高齢化した保存会だけで維持管理を行っていくことは難しく、そこで導入されたのがオーナー制度でした。「都市住民との交流を深めることにより、一緒に千枚田を守って行こう」という趣旨のもと、千枚田の一部を活用し平成8年度より田圃のオーナー制度が開始され初年度は68組のオーナーを受入れました。オーナーは、年間3万円をオーナー会費として支払い、100㎡の田んぼのオーナーとなり、田植えや稲刈りの他、畦そり、畦塗り、草取りなど昔ながらの手作業による様々な農作業体験を特典としてうける事が出来ます。丸山千枚田を日本の宝とし一緒に守っていきたくと、今では全国各地から毎年100組600人を超えるオーナーの申込があります。

また、丸山千枚田では地域のボランティア団体「紀和町ふるさとボランティア」が中心となり、虫おくり、大年まつりといった伝統行事を復活させ、



丸山千枚田での農作業体験のようす

地域の活性化と集客、都市住民との交流が図られています。

伝統行事の一つ、「虫おくり」は、昭和28年まで実際に丸山地区で行われていた行事で、現在の稲作では害虫駆除にあたるもので、その当時、農薬等もなく、なすすべがなかったことから、丸山地域の子供たちが集まり、お寺からお札をもらって、松明と太鼓、鐘などを手に「虫おくり殿のお通りだい」という掛け声を出しながら千枚田の中を練り歩き、火と音で害虫を追払う伝統行事です。この行事には、ひと粒でも多くのお米を収穫したいという素朴な農民の祈りがこめられた行事でしたが、農業の衰退に伴い「虫おくり」も途絶えることとなりました。しかし、平成16年に熊野古道が世界遺産に認定されたことから、これを記念して、平成16年から「虫おくり」を復活させ、地元の小中学生や丸山区民、さらに千枚田オーナーや一般の方々で丸山千枚田を練り歩き、千枚田の豊作を願うものとなっています。

平成21年には、棚田に1000本、平成22年からは1340本の松明を灯し、幻想的な景観の中で虫おくり行事が行われるようになり、平成24年からは、丸山千枚田に親しんでもらおうと、虫おくり行列への参加・キャンドルでの参加・虫おくりボランティアスタッフでの参加を呼びかけ、参加型のイベントとして開催され、年々来場される方も増え続け、北は北海道、南は鹿児島から約1100人の来場者が訪れます。今年は復活10回目を迎えたことと今年度中に熊野市まで高速道路が開通する予定であることから、これを記念して、虫おくりの最後には、北山砲と花火を打ち上げ、眼下には棚田の幻想的な情景、夜空を見上げると華やかな花火で参加者を魅了しました。

そしてもう一つの伝統行事として大年まつりがあります。大年とは、「最後の日」の意で、節分が冬の最後の日とし、翌日から春が訪れ、農作業の始まりとなる日と言われてます。

大年まつりとは、田起こしや畦そりなどの農作業が始まる前に、農作業の無事と五穀豊穡の願いが込

められた行事で、昭和25年まで毎年2月3日の夜に丸山神社で行われていました。丸山地区住民が丸山神社に炒った豆を供え、供えてあった豆をたばり、火を囲んで豆を食べながら大人はどぶろくを飲み、子供は鬼ごっこして遊んだり丸山地区住民の豊作祈願であるとともに、娯楽に厳しい時代の楽しみの一つでしたが、過疎高齢化や耕作放棄により途絶えてしまいました。

平成25年2月に日本ユネスコ協会連盟が主催するプロジェクト未来遺産に登録されたことから、登録記念として、地元ボランティア団体を中心に、丸山千枚田の畦そり体験の後に大年まつりを節分と初午をあわせた丸山千枚田らしいイベント要素を含んだカタチに復活させました。

日本の原風景「丸山千枚田」の五穀豊穡と一年間の農作業の無事を祈願することとともに、「どぶろく」「茶がゆ」などの熊野地域の食文化を伝えること、太鼓演奏やミニライブなどイベント要素もおりまぜながら集客と地域経済の発展が図られています。

丸山千枚田では、農作業体験や虫おくり、大年まつりのように昔ながらの歴史や農耕文化を残しながら現代にアレンジしていく形が多くの人達を引き付ける魅力の一つになっているのではないのでしょうか。

オーナー制度とは別に、平成11年度からは「千枚田を守る会」という新しい制度を設け、農作業体験は無く、年会費は1万円で経済的に保全活動に支援していただいております。

丸山千枚田の課題はこれを支える人材と労力、経費の確保です。ほとんどの作業が手作業であることから、作業効率が悪く、採算性を求めることはできず、さらには作業に参加されている保存会員の高齢化も進んでいます。このような状況下において、平成20年に保存会の組織強化を図るため、会員を丸山地区に限らず紀和町内全域から募集したところ、新たに20名の会員が増え一定の成果を上げることが出来ましたが、積極的な農作業参加には至らず、農業体験やボランティア活動を地域に呼び掛け、平成25年には熊野市外に会員を募集し10名の会員が集まりました。今後も千枚田保全への協力と保存会員の人材確保を進めていく必要があると考えています。

最後に、丸山千枚田の農耕文化や素晴らしい景観は、訪れた人々の心を豊かにしてくれます。先人が築き上げた、文化遺産「丸山千枚田」を舞台に、都市住民とのより深い交流が生まれるよう、オーナー制度及び体験交流事業の充実を図ることや、棚田保全に向けて熊野市ふるさと振興公社が核となり、地域住民と都市住民が一体となった取組みを行い、未来へと守り続けていきたいと考えています。



キャンドルに彩られた丸山千枚田

素晴らしい人と人の出会いから始まった
老人が守る文化遺産 丸山千枚田
北 富士夫

私共の町は、三重県の南端に位置し、三重県と和歌山県を境とする熊野川の支流北山川で、三県に跨る昔から有名な漕八丁と云う名所のある町です。昭和9年頃から50年頃までは鉱山の町として栄えた頃もありましたが、今は過疎の進む町となっています。

本日は、昔から小さな集落に先祖代々に語り継がれている昔話から御紹介します。今から885年前の平安時代の大治3年頃、長く続いた藤原氏の時代から鎌倉時代が変わろうとしている頃、藤原の一族である頼兼と云う武将が主だった13名の家来とその家族を伴ってこの地へ入山しました。その頃、この地には鹿が多かったことにともない、地名を入鹿郷と明記。自分の名も入鹿頼兼と改名。13名の家来も入鹿の姓にしたと伝えられています。13名の家来には、この辺りで一番高い山を一族の山とし、この山の見られる適地を分け与え開拓させ、その成果を見届け久安6年に64歳で一生を終えたと語り継がれています。

丸山千枚田は、入鹿幸太郎又の名を大家幸太郎が開拓しました。(この頃から入鹿八幡宮は10地区の総代が今も変わりなく守り継いでいます。)開拓が始まって400年の年月が流れた慶長6年の太閤検地で、田畑共に2240枚、広さは7町と記した古文書が残され、江戸時代になっても開拓され、昭和30年頃の面積は11町3反になっていますが、枚数は不明です。昭和30年代に入り、若い働き手が都会へ出て行き、残された老人では守り切れず、平成元年頃僅か30年の間に520枚余りに減少、残念無念の思いでした。昭和30年、入鹿村は3村合併によって紀和町になり、初代町長には入鹿一族、大河内の榎本氏が初当選。氏は丸山千枚田の中心を通り抜ける農免道路を建設。昭和48年に完成。耕作の便利は良くなったが減少をくい止める事が出来



9月 県道40号線展望所から

ずに30年の年月が流れました。

【素晴らしい出会い】

平成元年を迎え同じ一族、湯の口から中浦敏夫町長が初当選します。

この出会いから丸山千枚田は復活するのであります。当選され初の座談会に出席し、「この千枚田をこのまま山に返す事は先祖に対し申し訳がない。町が支援するから復田出来ないか。」と、提案されましたが、高齢の進む地区住民の大半の答えはノーコメントでした。二度とないチャンスを生かせなかったのが残念でした。平成4年、中浦氏が再当選され二度目の座談会。この前に、中浦町長は県庁に行き、田川知事と逢い、千枚田の復田にともなった県の支援を受ける事を約束して帰町していた様子で、席上町長の復田する決意が伝えられましたが、相変わらず即答も出来ません。其の後、役所観光課の二名がまとめ役として任命され、その一名が地元出身の田中氏だったこと、県からの支援が目に見えて数多くある中で、当時、松阪大学寺田先生の講演が『老人が守る文化遺産』でした。この時点から区民の気持ちが変わる意欲に変わります。平成5年8月、役所は千枚田条例を作成。丸山区民は保存会を結成し、平成5年10月1日、丸山神社でお祓いを受け、区民総出の作業開始でした。

悲しい別れもありました。復田した田の記念の田植えをすると心待ちして下さった知事さんでしたが、重い病でこの世を去られました。その後に忘れられない出会いもあります。北川新知事の誕生であります。当選され三日目の夕暮れでした。千枚田の看板の前で3人の立派な方が立話をしているところへ私も農作業を終わり通りかかりました。何げなくご挨拶をした所、思いもよらぬその方が北川知事であることがわかり、私にとっては感激の初対面でした。「引き続き変わらない支援をするから心配しないで頑張れ」と、励まして下さった一言を今も忘れることは出来ません。

【オーナー制度と案山子コンテスト】

数ある出会いの中でも中島先生との一生忘れることの出来ない出会いがあります。その後の作業中、幾度となく訪れて戴き、日本一の棚田作りのアドバイスのすべてがこの千枚田に生かされています。平成7年、先生からオーナー制度のお話を戴き、早速10アールの、3年間放置していた荒れ田で試作。すべての作業が終わるまでに30万円前後かかる事が判明。8年度から一口3万円でオーナーを募集。68組が初参加。その後は、毎年100組前後のオーナーが訪れて農業体験をしています。平成9年3月に復田した田820枚と役所に完了報告、1340枚の棚田に水が入りました。

案山子コンテストは、平成9年、農業新聞の小山氏との出会いから始まります。小山氏は一年間新聞の一面へ丸山千枚田の写真を掲載し、その時の提案で、初めは50体余りの案山子が睨みを利かせたおかげでこの年は豊作でした。

私が復田の作業に打ち込んだ5年間の思い出の中に、平成10年2月18日、熊野古道通り峠から更に200m登ったところに開設した千枚田を一望できる展望台があります。山主も地元の寺前氏。「思うだけ切れ」と、言う許可をもらって、一人で三日かけての伐採作業。40年間山林作業をした経験が生かされたのであります。その後、テレビの皆さんや新聞社の皆さんの放映や報道によって日本中の方に丸山千枚田がピーアールされ、中島先生が仰る通りの日本一の棚田が出来上がりました。通り峠を訪れて下さる方々に感動と登って見て喜びを感じて戴く事を私自身も大変嬉しく思っています。先日、6月22日、中島先生を通して、広島市の福山市から富士製作社長加藤さんがヘリコプターで訪れて下さいました。思いがけなく私も乗せて戴き、通り峠から見る千枚田よりはるかに壮大な我が町の棚田を見せて戴き、感謝感謝の一時を過ごさせて戴きました。丸山千枚田は年中たのしんで戴けるようになっていますが、特別に良い月は5月から6月の10日頃までが朝夕楽しめます。早朝の雲海と夕暮れの水田面に浮かび上がる夕やけ小やけの風景を皆さんに見ていただきたく思います。ぜひ一度お越し下さい。お待ちしております。

私は、平成5年8月、千枚田保存会々長に任命され、10年12月31日で会長を退任し、その後は千枚田の作業に携わる事なく現在に至って居ります。平成12年8月、なんでも屋にこにこ会を結成。お年寄りのお手伝いや御用聞きなどを行っていますが、最近では自分が助けて戴く年齢になりました。

今後、丸山千枚田を訪れて下さる学会の皆様、声をかけて戴ければいつでも棚田をご案内いたします。ご連絡下さい。お待ちしております。



1、2月頃 県道40号線展望所から

私の思い丸山千枚田について

丸山千枚田保存会会長 喜田 俊生

私が丸山千枚田に関わり始めたのは、平成20年春からで、当時募集していたオーナー制度に関わらせてもらったのでした。翌年保存会に入り、25年から第5代保存会長に就任しました。

昭和30年頃までは2200余枚あった水田が、高度成長化時代に入り若者が都会に流出、減反政策や農耕者の高齢化が進む中、作業効率の悪い棚田は杉や檜が植えられ、530枚まで減少してしまいました。



田植えを終えた丸山千枚田

平成5年に地元の住人の「ふるさとをこれ以上荒らしたくない」という思いと、紀和町の「地域振興政策」が合致し、現在のふるさと振興公社と丸山千枚田保存会が発足し、千枚田の復元に着手することになり、初代北会長を先頭に各会員の献身的な活動が始まることになるのです。

昨年11月13日に日本ユネスコ協会未来遺産委員会で、第4回「プロジェクト未来遺産」に登録されました。これは、「モデル性」「メッセージ性」「持続可能性」「実現可能性」「公益性」の各点において認められたものです。

「プロジェクト未来遺産」に登録されたことで、「百年後の子供たちに自然と文化」を継承していくため、いままで以上の活動の充実と、名実共に「日本一の丸山千枚田」を目指して保全活動だけでなく、観光のお客さまに対する接客マナー、オーナーさんへのサービス等々を独自性のあるものに工夫し、各地の棚田保全の実態を学習しながら、小さな棚田の「大きな保存会」を夢見て行きたいと思っています。

小さな棚田の特性を最大限に生かした農耕文化を、未来に受け継いでもらうためには、①保存会の

元に協力できる継続した働き手の確保②農地の荒廃対策（獣害対策含む）③予算の確保が必要と考えています。

私は、歴代の保存会長が勤めてこられた農耕と保全活動を、継承発展させていくために、若い保存会員が加入できる環境の整備（たとえば学生さんの長期休暇を利用した活動や、農村民宿のような安く宿泊でき、週末の農作業に従事するとか）を行っていくことが大切で、行政をはじめ企業や多くの方々の理解と協力が必要です。

毎年オーナー制度に130組前後が加入してくれて、年間のイベントに多数参加を願って、保存会員と共に農作業をしています。

初めての方ははじめてなりに、ベテランの方はそれなりに作業を楽しみ、保存会員の田舎弁ともうまく交流しながら、昔ながらのなれない手作業で、手に豆を作ることも苦にならず、田舎だからこその癒しと楽しみを味わってもらって、少しずつ参加者が増えていけばいいと思っています。

多くの方に丸山千枚田を知ってもらうために、①見に来てくれた方が記念になる物を作りたい、共に参加しての実演コーナー（稲藁を利用したの草履作り、しめ縄作り）、来訪記念札等々。②保存会員が語り部として、観光客サービスを充実させる。③保存会活動（石垣積みを始めとする農地補修作業の姿）を全国向けに情報発信していく。④生き物観察ができるビオトープ等を作る。やりたいことがあります。

丸山千枚田の20年～開かれた地域づくり～

千里金蘭大学教授 寺口 瑞生

かつて筆者は、三重県紀和町（当時）から丸山千枚田を核とする地域づくり構想の策定を依頼された。その際、地域づくりの主体を次の三つとした。第一の主体は地元丸山地区＝丸山千枚田保存会、第二の主体は行政＝紀和町ふるさと公社、そして第三に外部のサポーター＝千枚田オーナー。この三つの主体が連携することで、「開かれた地域づくり」の実現を目指すこととした。

第一の主体である丸山地区、住民全員で千枚田保存会が結成されたのは1993年8月のこと、それ以来困難な復田作業に取り組み千枚田を地域の誇りとして保全活動を続けている。ただ、高齢化の進展は如何ともしがたく、2008年度以降は地区外の方にも保存会への参加を呼びかけている。

第二の主体である行政、2005年11月の合併によって熊野市紀和町となり、ふるさと公社は2012年4月に一般財団法人・熊野市ふるさと振興公社

に移行した。

第三の主体である外部サポーター、1996年のオーナー制度開始以来例年100組を超えるオーナーとの交流が続いている。オーナーは年会費30000円を負担し、田植え・草刈り・稲刈りなどの作業を共にするが、1999年度以降、年会費10000円の「守る会」を別途発足させ、保全活動費の充足に努めている。

現在は、熊野市ふるさと振興公社が熊野地鶏・新姫などの地域特産品の開発・宣伝とあわせて、千枚田保全活動のアレンジ機能を担う。年間を通じた交流イベント「畦塗り」「田植え」「虫送り」「草刈り」「案山子作り」「稲刈り」「畦そり」などを通してオーナーやボランティアとの交流が深まる。地域に誇りを持ちつつ、地域外の元気を取り込む、丸山ではいまでも開かれた地域づくりが実践されている。



田植えイベントのようす

事務局ニュース

■第26回・棚田学会談話会（予告）

テーマ：棚田の保全と中山間地域の活性化

日時：12月14日（土）13：30～17：00

場所：早稲田大学・16号館501教室

講演①：「棚田と都市農村交流」

講演者：志田麻由子氏（農水省都市農村交流課）

講演②：「よそ者・若者たちの棚田へのまなざし

～社会調査実習の現場から～

講演者：堀田恭子氏（立正大学）

■投稿論文募集のお知らせ

棚田学会では、来年8月刊行の『棚田学会誌・日本の原風景・棚田』15号に掲載する原稿を募集しています。投稿規定をご覧の上、奮ってご投稿下さい。

・締切 2014年1月末日

現地見学会報告

上郷花畑棚田の保全・活用

～棚田を歴史遺産と一体化した観光資源に～

東北芸術工科大学 共創デザイン室

遠藤 牧人

今年（2013年）6月に棚田学会現地見学会を開催した上郷花畑棚田は、山形県西村山郡朝日町にある。2013年4月現在、標高250～500m、面積5.3ha、平均斜度20%の棚田を11人で耕作している。

町内には「日本の棚田百選」に選出された椹平棚田、隣接する山辺町には同じく大蔵棚田という有名な棚田がある。大蔵では山形のサッカーJ2「モンテディオ山形」との協力関係を軸に、近隣市町村のファンの応援も得ながら、付加価値の高いブランド米を生産している。椹平では天日乾燥にこだわったブランド米を生産し、営農の中心は50代、10代後半からの若手も複数営農しており、棚田で若手農家の談笑風景が見られるほど活気がある。展望台や休憩所の整備など、町をあげてその活動を支援している。

上郷花畑棚田はそれらに比べると無名で、軽自動車以外の車が入れない道幅から、一般の人は一見するのがさえ難しい。トキやコウノトリのような棚田を印象づける生物も存在しない。高付加価値のブランド米の生産もしていない。全国の多くの棚田同様、上郷花畑棚田は保全の危機に晒されていると言える。しかし、この棚田からはじつはとんでもなく旨い米がとれる。昨年、隣の大江町の青年部の集まりで、同じ条件で炊いた有名ブランド米を含む様々な米を、銘柄を伏せて試食してもらったのだが、並みいる有名ブランドを押さえて最高位に輝いたのは、上郷花畑棚田の天日乾燥米だったのである。うまい米を作る実力があるのに認知されていない棚田は全国各地にあるはずだ。そういう棚田に、その棚田ならではの隠れた宝を見い出して光を当て、ファンを増やし耕作を支援してもらい、最終的には営農者の確保に結びつけるのが我々の務めであろう。

【上郷花畑棚田の宝とは…】

上郷花畑棚田の隠れた宝の一つは、現地見学会で案内した山中の水源である。白鷹山（994m）の伏流水で水量は毎分300～400l、水温は9.5℃と年間を通して一定している。2つの水神様が祀られ

ていて、一つには「文久3（1863）年」と関係者の氏名が記されているが、風化が進んで判読できない古い祠も大切に保存されている。水源への道は普段は判然としないが、地元農家の努力で、当日は30名を超える見学者が安全に歩ける道が確保された。

もう一つは昨年（2012年）末に公民館で発見され、現地見学会で鑑賞した古地図（嘉永6年8月と記載あり）にも記載されている「宇津野館山城跡」である。棚田の中央付近にある小高い丘からは、落葉すると近辺の棚田はもとより、最上川対岸の椹平までもが見渡せる。麓からは紀元前3000年頃のものと言われる「ヒデリ田遺跡」も発掘されている。地元では、この二つの宝を棚田と一体のものと考えて、棚田耕作を中心とした古の生活を丸ごと学び、現代の生活に活かすような、この土地独自の観光資源にして行こう、という機運が、先の現地見学会のあと高まりつつある。8月下旬には町の担当者も交えての会合が開かれ、今後は町の支援も受けられそうな兆しがある。関係者の間には、この秋からは館山城跡に登るための簡易的な歩道の整備を始め、地元の人たちにまずその存在を認知してもらおうという動きが出てきた。11月16日には住民のための見学会と勉強会も企画され、準備が進みつつある。

一連の動きに弾みをつけたのは、他でもない棚田学会現地見学会である。各分野の専門家との交流は、地元の農家にとって、よい刺激になったのではなかろうか。この場を借りて関係各位に深くお礼を申し上げたい。今後は椹平や大蔵の事例に学びつつ、上郷花畑ならではの活動に育てて行けたらと思う。

生産効率だけを考えたら棚田は生き残れない。今後も棚田の保全・活用には着地形・体験型観光の視点がますます大切になるだろう。そんな時代に一教育関係者として何ができるか——棚田を通じて地元の皆さんと共に、人生を学んで行けるのは幸せだ。



2013年6月15日 現地見学会での集合写真

日本の棚田百選紹介

長崎県東彼杵郡波佐見町『鬼木棚田』

鬼木棚田協議会 事務局長 前川 芳徳

波佐見町は、長崎県中央北部に位置し、佐世保市・川棚町や佐賀県有田町・武雄市・嬉野市と隣接する県境の町です。総面積 56 平方 km で海洋県長崎にあって海に面しない唯一の町であり、窯業と農業の 2 大産業により発展してきました。

町の北東部に位置する鬼木地区は、世帯数 70 戸、人口 250 人ほどの小さな集落で、米生産を中心とした兼業農家がほとんどの集落です。いかにも鬼が住んでいそうな鉈（なた）岩、挽臼（ひきうす）岩、月花（がちか）岩などの奇岩怪岩があり、それらを背景にした急峻な山々の裾野が馬蹄形に広がった中山間地域であり、狭い農地を少しでも有効に使うと先人達が営々と築いた石垣による棚田は、展望所からみると電柱や電線が 1 本もなくすばらしい景観を保っています。また、溜池やダムがないことも大きな特徴で、水に不自由しないのは「水源の森」にも指定された奥深い山々の恩恵でしょう。

集落では、平成 12 年度に始まった中山間地直接支払制度の協定組織として「鬼木棚田協議会」を発足し、棚田の保全保存活動を展開しています。

最初に取り組んだのは、平成 12 年 9 月に開催した「鬼木棚田まつり」でした。水田の転作作物として作られた大豆を少し早めに収穫してもらい、都市部の方に楽しんでもらおうという程度のものでした。わずか 200 人位の来場者であったものの、その時得られた満足感や充実感がそれ以降の活動につながっています。次年度からは、案山子コンテスト、農産物直売、棚田ウォークラリーなど内容を充実した結果、まつり当日は 6,000 人以上の来場者で賑わい、あちこちで案山子と一緒に記念写真を撮る微笑ましい光景が見られました。案山子展示期間 2 週間を含めると延べ 20,000 人以上の見物客で賑わう町の一大イベントに成長しました。この案山子コンテストは、秋の風物詩として毎年各テレビ局や新聞紙に取り上げられています。

成果としては、住民が来訪者との交流により受け入れる側の態勢整備や充実を意識するようになったことや、これらの活動により連帯意識が高まったこと、「鬼木」という名の認知で集落における農業振興の手段としての基礎作りができたことです。そして何より、集落に住んでいる人たちが、これまで何

にもないただのさびれた田舎というマイナスの意識から、「棚田」というすばらしい財産を持つ故郷と誇れる心、自慢できる心を醸成できたことそのものが大きな収穫だったと思います。

今、波佐見町では「きなっせ 100 万人」をスローガンに、窯業と農業が融和する町として、体験型観光を中心とした交流人口の拡大による地域活性化策を積極的に展開しています。（「きなっせ」とは「おいでください」の意味です。）400 年の歴史と伝統を誇る全国屈指のやきものの産地として栄え、肥前陶磁器の中核産地でありながら、明治までは伊万里港から全国に出荷されたので「伊万里焼」、鉄道が発達すると有田駅からの出荷となり「有田焼」の名で広まり、「波佐見焼」の名はあまり世に出ることがありませんでした。しかし、今では町に多くの来訪者を迎えるようになり、生活に密着した「用の美」を備えた焼物としての評価をいただき、その知名度はかなり向上してきました。「食」と「器」は切り離すことができません。言い換えれば「農」と「陶」であり、本町では「棚田は 21 世紀の社交場」の思いのもと、これらを素材にした全国棚田（千枚田）サミットの開催を目指して今後の活動を進めていこうと思います。



鬼木棚田

【編集後記】

「棚田と観光」をテーマにお送りした棚田学会通信も今回が最後となります。毎回 3 号、1 年間で 1 サイクルとして、今後も様々なテーマの「棚田学会通信」を発行していきたいと考えています。

棚田学会通信 第 41 号 2013 年 10 月 31 日発行
発行 / 棚田学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内
TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180
E-mail: tanadagattukai@yahoo.co.jp